

# 中学校社会科歴史的分野における 日本史の背景として世界史を捉える授業実践

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 三神 祐貴

## 1. 研究目的

近年、歴史学研究において、グローバルヒストリーという考え方が注目されている。グローバルヒストリーとは、地球規模での世界の諸地域や、各人間集団の相互関係を通じて、新たな世界史を構築しようとする試みである。また、歴史教育の場においても、これまで別々のものとして扱われることの多かった日本史と世界史を、一つのものとして見ていくことが求められるようになった。しかし現時点では管見の限り、教育現場においては、その授業方法などは手探りで進められている状態であり、中学校社会科歴史的分野の学習においても同様である。

ところで、グローバルヒストリーと中学校社会科歴史的分野とではそもそもの目的が異なる。地球規模での動きから世界史を構築しようと試みるというのがグローバルヒストリーの目的である。そのため特定の国家を対象として扱っていくことは少ない。これに対し、中学校社会科歴史的分野は日本国民の育成を図る学校教育の一環である。そのため日本国という前提を強く意識したものである。よって歴史教育に取り入れる際には、グローバルヒストリーをそのまま学習するのではなく、考え方の一部を取り入れて使っていく必要がある。これらのことを踏まえて、中学校段階での世界史と日本史をつなげた視点を考えるならば、その一つとして、「日本の歴史の背景にある世界の動き」というものを設定することができるであろう。またその際には、グローバルヒストリー的な世界の動きという流れを捉えながらも、あくまでも日本という枠組みを意識して考えていくことが重要である。このように日本に重点を置きつつも、海外の動向を取り入れることで、日本史だけでは説明がつかないことや、不明確なことに對して、より多面的に考えるための手がかりとなると考えられる。

以上のことから本研究の目的は、中学校社会科歴史的分野を対象とし、世界史と日本史をつなげた視点として、日本史の背景として世界史を捉える授業実践を行うことである。またその際にグローバルヒストリーの考え方を取り入れ、その効果の検証を行う。

## 2. 歴史教育における現状

### 2-1. 歴史教育に求められる動き

現在、歴史教育において、日本史と世界史をひとつのものとし扱うことが重視されている。

実際に進められた動きとして、令和4年、高等学校においては新科目として「歴史総合」が新設された。歴史総合の新設により、旧科目では、「世界史」と「日本史」を別科目として分けて扱っていたが、歴史総合で日本史・世界史を統合して近現代史を学習する形となった。また歴史総合が必修科目とされていることから、世界史と日本史を一つのものとして扱っていくことを重視していることが分かる。

日本史と世界史を繋げた学習の実例として高等学校の歴史総合を挙げたが、世界史と日本史の両者を統合的に扱っていくことが求められているのは高等学校だけではない。以下は中学校学習指導要領（平成29年告示）社会編の一部抜粋である。

- ・グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次の通り育成する
- ・我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解する

これらの内容から、世界と日本の繋がりを意識し、世界の歴史を背景として日本史を捉える視点の育成が中学校の歴史教育においても求められていることがわかる。ここでは中学校の学習指導要領の内容を例に出したが、中学校以外の各校種、各科目の学習指導要領においても、似た表現が使われている。このことから、社会科・歴史教育全体を通して、世界史と日本史を合わせて学習を進めていくことが求められていると言える。

## 2-2. 中学校社会科歴史的分野に求められるもの

中学校での歴史学習は、小学校における歴史学習と、高等学校における歴史総合とのつなぎとしての学習が求められるものと考えられる。

小学校における児童にとって、歴史を歴史という形で学習するのは初めての経験である。そのため、歴史的な用語の一つ一つを知識として取り入れていくことが、児童にとって第一の必要事項であると考えられる。また、人物史としての要素が強いことも特徴である。内容としても日本と日本に関わる人物を中心に焦点を当てており、歴史において日本と世界が関わっていることを意識させるには、限界があると考えられる。

高等学校においては、「歴史総合」、「日本史探求」、「世界史探求」という科目に分かれている。この内歴史総合は、世界史と日本史を融合するという位置づけである。高等学校学習指導要領では、歴史総合で扱うこととして、「世界とその中の日本」と記されている。そのためあくまでも世界を中心に見つつ、その中での日本の位置づけを確認するものとなっている。日本史探求においては日本史を、世界史探求においては西洋史及び、東洋史についてそれぞれ細かな事項まで扱っている。これらの二科目は歴史総合を履修後に、その内容を踏まえて学習する。

以上小学校の歴史学習及び、高等学校の歴史総合の特徴を踏まえ、本研究では「日本の歴史の背景にある世界の動き」という視点を中学校社会科歴史的分野で生徒に養うものとして設定する。これは中学校学習指導要領の文言に基づいている。自国の歴史について初めて扱う小学校、世界を中心にしつつその中での日本の位置づけを確認する高等学校の歴史総合、その間をつなぐものとして、中学校では日本を中心にすえつつ、その背景にある世界の歴史を扱っていくことが必要である。

## 2-3. グローバルヒストリーの概要

前述したように、グローバルヒストリーとは、地球規模での世界の諸地域や、各人間集団の相互関係を通じて、新たな世界史を構築しようとする試みである。

日本におけるグローバルヒストリー研究の提唱者の一人である水島司によれば、グローバルヒストリーの主要な特徴として以下の五つが挙げられる。(1)取り扱う時間軸が長く、数世紀にわたる長期的動向を問題にすること、(2)従来の伝統的な一国史の枠組みを超えて、広域の地域を考察の対象とすること、(3)従来の世界史解釈の主流であったヨーロッパ世界の歴史を相対化し、ヨーロッパ中心史観に代わる見方を提示すること、(4)世界の異なる諸地域の相互関連、相互の影響を解明し、繋がりや関係性を重視すること。(5)ヒト・モノ・カネ・情報・技術・思想など地域横断的な問題、あるいは、疾病・植生・生態系・自然環境の変化など生態学や環境に関する問題などを、普遍的な概念としこれらの移動・交流に着目すること、以上の五点である。

このような多様な問題を扱うにあたって、グローバルヒストリーでは「比較」と「関係性」を重視する。グローバルヒストリーはこれらを踏まえて、因果関係や類似・差異に着目しながら、新しい全体像を構築する方法論と言える、外交と国際政治、経済や環境など、現代のグローバルな諸問題を考える動きに影響を与えたとされる。そのため現代社会に至るまでの世界の捉え方として重要視されている。

#### 2-4. 本研究におけるグローバルヒストリー、歴史総合、中学校社会科歴史的分野の位置づけ

ここまで、世界史と日本史を繋げて解釈していくものとして、グローバルヒストリー、高等学校における歴史総合、本研究で対象とする中学校社会科歴史的分野をそれぞれ挙げた。本研究におけるこれらの位置づけを明確化する必要がある。

グローバルヒストリーは従来の国史の枠組みを相対化したものである。そのため、日本などの特定の地域自体に着目し扱っていくことは少ない。このグローバルヒストリーを、世界史と日本史を繋げた見方の到達点として据え、歴史総合と中学校社会科歴史的分野はそこに至るまでの過程として捉える。

高等学校学習指導要領では、歴史総合の学習として「類似・差異」、「因果関係」に着目することが示されている。これは、グローバルヒストリーにおける比較を重視し、それを踏まえた関係性から全体像を捉えようとする部分と重なる。

また、歴史総合では「近代化」、「大衆化」、「グローバル化」という三つを、近現代の歴史の大きな転換を示す大項目として扱っている。この三つの大項目は、グローバルヒストリーにおける地域横断的な問題である普遍的概念としての考え方と同じ、テーマを設けて歴史を追っていく考え方である。加えて歴史総合では「世界との中の日本」ということを意識して学習を行う。これはグローバルヒストリーにおける、国史の枠組みを超えてより広域を対象に考えていくことに通じる見方である。ただし、「歴史総合」では、日本は他と比べ大きく扱われている。世界を中心的に見つつその中で日本の位置づけを確認するような内容となっている。

本研究ではグローバルヒストリー、歴史総合を見据えたものとして中学校社会科歴史的分野を位置づける。これら二つに向けた学習として、本研究でも比較と関係性を意識して扱っていく。また、歴史の見方として、普遍的概念を用いて、その移動と交流から読み解く考え方を取り入れる。

一方で、これら二つとの明確な違いは、日本の位置づけである。グローバルヒストリーでは国史の枠組みを相対化し、地球規模での動きを捉える。歴史総合では「世界との中の日本」として、世界の動きを中心的に見つつその関連として日本を見ていく。一方で中学校社会科歴史的分野の学習指導要領では「日本とその背景としての世界」として記されており、本研究でも「日本の歴史の背景にある世界の動き」という視点を設けている。あくまでも日本に重点を置きながら、その背景として世界の動きを捉えていくというものとなっている。つまり、中学校社会科歴史的分野、歴史総合、グローバルヒストリーというように段階を進めるごとに日本の存在が薄まり、世界に重点を置くものとなる。

### 3. 研究方法

以上のことを踏まえて、本研究では、中学校段階での世界史と日本史をつなげた視点の育成を図る授業実践を計画する。

授業実践は山梨県内の公立中学校の第2学年に所属する3クラスを対象とする。また、授業の前後に歴史学習の意識に関するアンケートを行う。また、授業を通しての生徒の授業感想をとる。このアンケート結果と授業感想を分析し、世界史と日本史を繋げた視点を育成する授業の効果を検証する。

## 4. 授業実践

### 4-1. 授業概要

〈日程〉

2024年12月11日、12日、13日

〈研究対象〉

山梨県内公立中学校第2学年3クラス

〈単元〉

社会科 中学生の歴史 (帝国書院)

第4章 近代国家の歩みと国際社会

第1節 欧米諸国における「近代化」

第2節 開国と幕府の終わり

〈時数〉

全2時間

### 4-2. 授業内容

本授業は、欧米諸国における「近代化」、開国と幕府の終わりという二つの単元にまたがって扱ったものである。両単元は、中学校学習指導要領社会科編歴史的分野のC(1)「近代の日本と世界」に該当する学習である。

欧米諸国における「近代化」では、欧米における市民革命を発端とした近代思想の広がり、近代国家の成立と、国民意識・ナショナリズムの拡大を学習する。同時に産業革命を起点とした技術革新によって地球規模での貿易の拡大と、各国の軍事力の強化が起こることを学ぶ。さらにこれらの動きが世界的な影響として波及していく様子が見られることを学ぶ。

開国と幕府の終わりでは、開国をきっかけに日本が海外の影響を強く受けて変容していく様子を学習する。またその中で近世の秩序の中心としての江戸幕府が終焉し、新たに明治政府が誕生する礎が築かれることを学習する。

生徒は、欧米諸国における「近代化」、開国と幕府の終わりという二つの単元をそれぞれ既に学習している。本授業はその上で単元のまとめとしての位置づけとなる。既習内容を活かしながら、両単元で共通の項目をグローバルヒストリーにおける普遍的概念とする。この普遍的概念を中心に、近代ヨーロッパ・アメリカと江戸幕府とを比較し関係性を考える中で、世界の歴史的な動きが日本の歴史に影響を及ぼし、連動しているということを理解させる。このことを通して世界の歴史を大観する能力を育成し、「日本の歴史の背景にある世界の動き」という視点を育む。またこれ以降の学習においても海外の影響を踏まえて考えることをねらう。

2時間を通して向き合う学習課題として「250年続いた江戸幕府が開国してすぐに滅亡したのはなぜか?」というものを設定した。設定にあたって、生徒の感覚的にわかる範囲内で日本史の背景に世界史の動きがあることを理解させ、それをもとに考えさせるように意図した。まず日本史の中でも江戸幕府という安定した体制が長く続いたという事実を250年という数字を強調する。加えて開国後の十数年で江戸幕府が終焉したことを示し、その原因が海外にあるのではないかという考えに向くようにした。

また本授業では、学習課題に向かうにあたって考える要素として(1)軍事力、(2)貿易、(3)近代国家、という三つの普遍的概念を設定した。これらは市民革命と産業革命という二つの革命を端にした近代化において重要な項目である。また、当時の時代背景としての帝国主義に着目したものである。軍事力は帝国主義において、国家間の力関係として重視される。貿易は国家間の利益の関係としての要素である。帝国主義における植民地貿易も力関係に大きな偏りがあるもののあくまでも貿易の形をとっており、こ

の貿易で有利な立場をとることが各国にとって重要なこととなる。近代国家は様々な意味で解釈されるが、本授業においては教科書の説明にのっとり「国民が一つにまとまり運営する国家」とする。この国民のまとまりというものが、国家を形成していく上で重要な要素となる。この軍事力、貿易、近代国家という三つを、近代化に大きく影響を与える普遍的概念として扱う。

第一時でこれまでの学習内容の復習を行い、その中から学習課題に向き合うための考える要素として普遍的概念（軍事力、貿易、近代国家）を設定する。第二時で普遍的概念に基づきながら学習課題である「250年続いた江戸幕府が開国してすぐに滅亡したのはなぜか?」について考えるという過程をとった。

表 1

| 時数  | 授業内容                                                                                                                                                                                                                             |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第一時 | 問「欧米が強くなった理由を3つにまとめよう」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・市民革命と近代国家の形成について確認</li> <li>・産業革命とその影響について確認</li> <li>・確認した内容をもとに、欧米諸国が強くなった理由三つをまとめる「軍事力」、「貿易」、「近代国家」</li> </ul>                                                 |
| 第二時 | 問「250年続いた江戸幕府が開国してすぐに滅亡したのはなぜか」 <ul style="list-style-type: none"> <li>・江戸幕府が終焉するまでの確認</li> <li>・江戸幕府と近代化した欧米とを比較</li> <li>・「軍事力」、「貿易」、「近代国家」に基づき問いについて考える</li> <li>・今回扱った内容をまとめ、三つ「軍事力」、「貿易」、「近代国家」、が明治以降も重要となることを示唆</li> </ul> |

## 5. 結果と分析

### 5-1. アンケート概要

本研究では授業実践の事前と事後にそれぞれアンケートを実施した。事前アンケートでは主に、生徒の普段の歴史学習において重視していることを中心に意識調査を行った。事後アンケートでは本授業を受ける際に意識したこと、今後の授業で意識したいことを中心に意識調査を行った。

以下は、実施したアンケートの概要である。

表 2

|      | 事前                     | 事後                     |
|------|------------------------|------------------------|
| 実施日  | 11月14日                 | 12月17日、12月18日          |
| 対象   | 山梨県内公立中学校<br>第2学年の3クラス | 山梨県内公立中学校<br>第2学年の3クラス |
| 回答数  | 78名                    | 77名                    |
| 実施形式 | Google Forms           | Google Forms           |
| 回答時間 | 約10分                   | 約10分                   |
| 質問数  | 4項目                    | 5項目                    |

このアンケートに加え、授業実施直後に授業感想をとった。A5の紙に授業終了前5分程度で記入してもらったものである。授業に対する率直な印象を確認するために行った。

これらのアンケート結果及び授業感想を通して、本授業の効果を検証する。

## 5-2. アンケート結果の分析

アンケート結果から、歴史の授業における注目している点に変化が見られた。

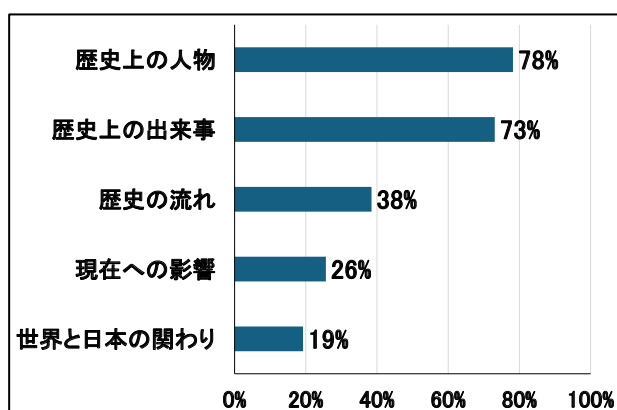


図1 普段の授業での注目している点

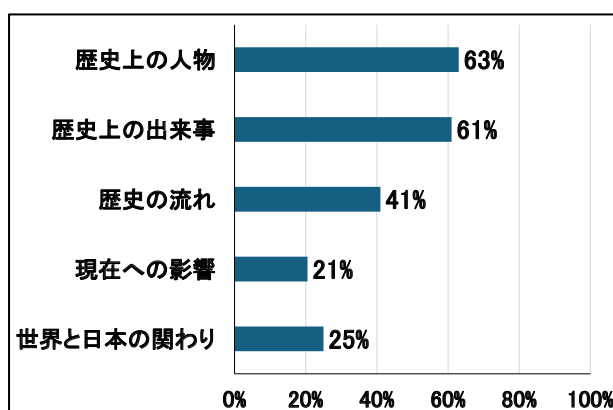


図2 今後の授業で注目したい点

図1は事前アンケートから「あなたは普段の歴史の授業で、どのような事に注目していますか。」という質問、図2は事後アンケートから「あなたは今後の歴史の授業で、どのような事に注目したいですか。」という質問に対する回答の内訳である。この質問は複数回答が可能なものである。

図1より授業実施以前の段階では、歴史上の人物、歴史上の出来事といった、従来から重視されている部分に生徒の注目が集まっていることが分かる。一方で世界と日本の関わりは、それらと比べてあまり重視されていない。

図2より授業実施以後については、世界と日本の関わりについて重視する傾向が強まったことが分かる。このことから、本授業実践が生徒に世界と日本の関わりについての意識させる内容となっていたことが考えられる。

また、授業実施以後では、歴史上の人物、歴史上の出来事の二つの項目で、注目しようとする生徒が減少した。これは、本授業を実施するにあたり、比較や関係性を考えることを通して、グローバルヒストリー的な全体像を意識した半面、特定の人物や出来事一つ一つについてはあまり大きな扱いをしなかったことが原因であると考えられる。

次に、日本の歴史の背景にある世界の動きという視点が、生徒にとってどの程度わかりやすいものであったのかを分析する。図3は事後アンケートから、「今回行った授業はどのように感じましたか。」という質問に対する回答である。この質問は、わかりやすかった、少しわかりやすかった、少しわかりにくかった、わかりにくかった、という四つから選択するものである。

これによると、わかりやすかった、少しわかりやすかったという好意的な意見がほとんどを占めていることが分かる。また、付随する質問としてその理由を問う質問をした。これは自由記述による回答形式をとった。図4はこの内、わかりやすかった、少しわかりやすかったと回答した生徒の記述内容を分類したものである。これによると日本と世界の関わりについて言及した意見が、27%を占めており、全体で2番目に多かった理由であることが分かる。このことから、日本の歴史の背景にある世界の動きという視点は生徒の主観的な理解度に対して、ある程度の効果があるものと考えられた。

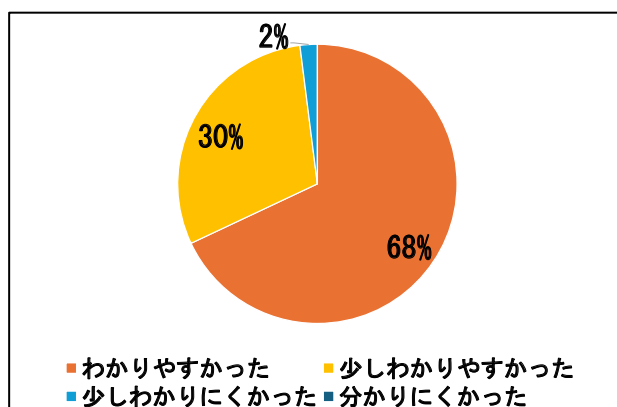


図3 授業実践のわかりやすさ

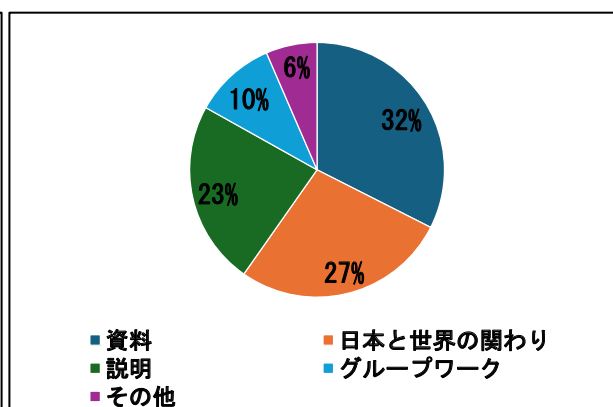


図4 わかりやすかった理由

### 5-3. 授業感想の分析

授業感想から、授業中の説明の仕方、資料の扱いなどの感想がみられた。このうち本研究に関連するものとして、日本と世界の関わりについて言及したものを、幾つか原文のまま抜粋した。

- ・外国の影響は日本の影響にもなることを知っておもしろかった。今後の影響もみてみたい。
- ・日本と外国の歴史を比べてとても面白かったです。
- ・2つの革命によって日本までえいきょうをおよぼすことを理解できておもしろかったです。
- ・授業をうけて今まではただ幕府はさつまと長州藩にボコされたでおわっていたことが、世界史や近代化ともかかわってくると知ってびっくりしました。いままでならったこともなにかその時代の世界で起きた出来事となにかかかわっているのかを調べてみようかなと思いました。
- ・外国の歴史が日本の歴史に深くかかわっていることを知りとても驚きました。外国と日本との、関係をもっと詳しく調べてみたいと思いました。
- ・欧米と日本を比べることたくさんのが分かった。
- ・三つの視点からくらべてわかりやすかった。

これらの内容から、日本と世界の関わりについて意識した授業が、生徒にとっての面白さの要素となり得ることが考えられた。比較や関係性、普遍的概念などについての言及も多く、グローバルヒストリー的な考え方が、生徒の思考を補佐した様子が伺える。

## 6. 考察

### 6-1. 成果と課題

以上のことから、中学校段階での世界史と日本史をつなげた視点を持たせる授業は、生徒の歴史理解に一定の効果があるものと考えられた。世界史の内容と日本史の内容は、本来別の単元として扱うものであるが、“単元のまとめ”という位置づけでこれら二つを直接的に繋げることで、生徒の注目が世界と日本の関わりという点にも集まることが分かった。また、グローバルヒストリー的な考え方として、比較と関係性、普遍的概念の移動や交流を取り入れることで、生徒の思考を補佐することが分かった。

一方でグローバルヒストリー的な考え方を重視する中で、人物や出来事などの詳細についてはあまり重点的に扱わなかった。そのことが、生徒の注目点にも影響を与えることがアンケート結果からは読み取れた。今回の授業が単元のまとめという位置づけであり、既に一度内容としては扱っていることを前

提とした授業であるため、詳細については簡単な扱いとしたことが影響したと考えられた。初めて扱う内容などでグローバルヒストリー的な考え方を取り入れる場合は、この点を考慮する必要がある。

また本研究では、日本史の背景として世界史を捉える中学校での授業実践を、高等学校の歴史総合に繋がるものとして位置付けた。しかし本研究の内容が歴史総合に対してどのように影響するかまでは調査するに至らなかった。そのため引き続き研究が必要となる。

## 6-2. おわりに

本研究では、中学校段階での世界史と日本史をつなげた視点として、日本史の背景として世界史を捉える授業実践を行った。この授業実践にあたって、地球規模での新たな世界史を構築しようとする試みであるグローバルヒストリーの考え方を取り入れた。特に比較と関係性、普遍的概念の移動と交流という点を重視しながら扱った。結果として生徒の理解に一定の効果が見られた。日本と世界の関わりについて生徒の注目が高まった。また、歴史学習の面白さといった意欲の部分にもつながることが分かった。

以上のことから、グローバルヒストリーの考え方を取り入れた、日本史の背景として世界史を捉える授業は、史を客観視させ、他国との比較や関係性に目を向けさせることから、より高次の社会科歴史教育の視点を育む効果のある方略であると言える。

## 〇. 参考・引用文献

- ・ 中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説社会編
- ・ 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説地理歴史編
- ・ 土居 亜貴子, 奥野 雄士郎, 岩本 和也, 浅井 信雄(2019)「新学習指導要領をふまえた社会科の授業実践― 歴史総合・日本史探究・世界史探究への試み ―」教職教育研究センター紀要 24 号
- ・ 奈須 恵子(2015)「世界史の中に日本史を位置づける歴史学習―世界史 A における日本史学習の指導法について―」立教大学教職課程教職研究 第 26 号
- ・ 青柳 慎一(2021)「中学校社会科から高等学校地理歴史科「地理総合」への接続についての一考察」埼玉大学社会科教育研究会『埼玉社会科教育研究』No.27
- ・ 二井 正浩(2012)「グローバルヒストリーとしての World History for Us All のカリキュラム構成―トランスナショナルでトランスカルチュラルな歴史学習への可能性―」社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第 24 号
- ・ 山内 進(1976)『近代国家創設の理念的推進力に関する一視角 : J.リプシウスの歴史的意義』一橋研究 1(1)118―126
- ・ 秋田 茂(2018)「グローバルヒストリーから見た世界秩序の再考」日本国際政治学会編『国際政治』第 191 号
- ・ 黨 武彦, 藤瀬 泰司, 小田修平, 小鉢 泰平, 相良 眞由, 山本圭祐(2019)「中学校歴史教育における世界史的視点からの授業開発」熊本大学教育実践研究 第 36 号, 173―180, 2019
- ・ 朝尾 直弘, 網野 善彦, 石井 進, 鹿野 政直, 早川 庄八, 安丸 良夫 (1994)『岩波講座 日本国史 第 16 巻近代 1』岩波書店
- ・ 水島 司(2010)『グローバル・ヒストリー入門』山川出版社 世界史リブレット 127
- ・ 秋田 茂, 桃木 至朗(2013)『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会 ; 四六版
- ・ 山内 進(2012)『文明は暴力を超えられるか』筑摩書房
- ・ 町田 明広(2015)『グローバル幕末史』草思社
- ・ セバスティアン・コンラート著 小田原 琳 訳(2021)『グローバル・ヒストリー 批判的叙述のために』岩波書店